

知識と社会的文脈

——社会的表象理論における「認知的多相」概念の検討——

一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程 熊谷 有理

【序論】社会的表象理論（以下SRT）の提唱者 S. モスコヴィシは、精神分析の普及によってフランス社会に生じた変化を分析・記述した研究で、社会的領域において多様な知識形式——科学、常識、信念、イデオロギーetc.——の動的な併存が見られることに注目し、この現象を記述するために、認知的多相 (cognitive polyphasia) という概念を導入した。モスコヴィシは認知的多相の概念が、知識と社会をめぐる既存の社会科学的研究の理解を揺るがす、*disturbing*な性質を持つことを主張した。この概念は、モスコヴィシによる導入から半世紀近くの間放置されていたが、90年代に知識の社会心理学研究に固有のアプローチを確立する要請が高まるなかで、新たな関心を引きつけ始めた。現在、認知的多相の概念を用いて展開される議論では、この概念が、行為の多様な文脈に適合的な仕方でも知識が構築されることを考察可能にするために、現代の多元的で変動的な社会的条件に適した知識の分析にヒントを与えることが主張されている。しかし、認知的多相の概念が、知識が特定の社会的文脈（/社会関係）の形式と構造を反映するという以上のことを含意しないなら、モスコヴィシがこの概念に与えていたはずの *disturbing* な性格は理解できない。本報告では、認知的多相の概念が、知識と社会的文脈の関係性を重視することを促すというよりも、社会的文脈（およびその知識との関係）を新たな仕方でも発想するものであることを指摘し、その発想を明確にすることを目指す。具体的な作業としては、認知的多相に関する議論で、知識の文脈依存性という同一の主張が展開されるなかで実際に扱われている多様な分析対象を整理・比較しながら、SRTにおける社会的文脈の発想を再構成する。

【結果】SRTにおいて社会的文脈は、知識と社会の“関係性”として理解される。SRTでは、知識とそれに固有の形式・構造を与える社会があり、それらの関係の性質（因果的/規範的、相互規定的等）が問われるというより、未分化な全体から知識と社会が、個人や集団の“多様な”知識とそれらが指向する“同一の”社会的対象・状況として、分節化される過程が焦点化される。たとえばこの見方では、知識が社会に共通の規範に従い構造化されるという規範の实在論的解釈は否定される。知識が産出される過程で、同一対象に指向する多様な知識形式間の関係性が可視化されることを通して、社会的文脈が“翻訳”される——集団間の葛藤や変化の原因として共通の規範が遡及的に構築される。知識と社会は、互いに他へ与える影響を通してのみ現れる。この全体のなかで、社会的に有意味なものや合理的なもの、そうでないものが決定される。

【結論・展望】上述の発想を敷衍し、次のことを主張したい。SRTの発想は、知識の社会的構築を、社会の主体／主観の自己同一性を前提として語り、出来事や経験の社会的有意味性を形式的・機能的な同一性を基礎に考察する見方（知識・行動の機能主義的説明）にたいするオルタナティブを示している。SRTでは、多様な知識形式が表象する多様な真理やリアリティとの接続を通して、社会的に合理的なものが再定義される過程が考察されるために、多様な知識形式の併存が見られることは秩序を脅かす事態などではなく、社会的思考の常態と見なされる。